

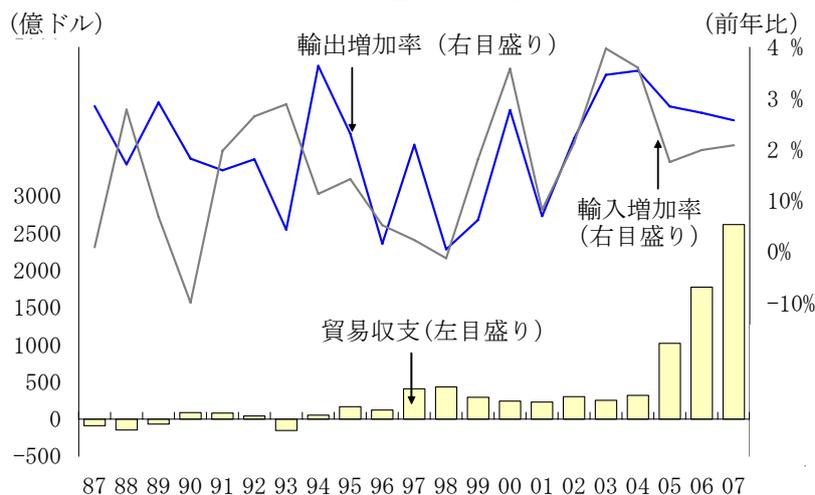
Weekly エコノミスト・レター

ニッセイ基礎研究所 経済調査部門

中国経済動向 ～ 鈍化し始めた貿易黒字拡大のペース ～

- ・ 中国の貿易黒字は、2007年も2,622億ドルと過去最高額を更新したが、10月以降、貿易黒字の増加ペースは鈍っている。鉱物性燃料の貿易赤字が拡大、労働集約的製品の黒字拡大ペースが鈍化、金属製品の黒字額も輸出の急減速で減少している。輸出抑制策のほか、能力増強投資の一巡や、原油価格の上昇、米国の景気減速と高成長が続く中国との内外景気格差の拡大という複数の要因が影響していると考えられよう。
- ・ 足もとの統計は「デカップリング（切り離し）」の期待通りではない。米国の個人消費の鈍化が明確になり、EUの需要アブソーバー機能にも一層の拡大が見込めないことから、中国の輸出は鈍化、貿易黒字の頭打ち傾向は続くだろう。
- ・ 日本にとって中国の輸出相手国としての重要性は高まっている。電気機械の世界需要の動向は日本の対中輸出を左右する大きな要因だが、2008年は中国の成長が内需に軸足を移すと見られることから、中国国内市場での競争力の重要性が増してくるだろう。

2007年も貿易黒字は過去最高を更新、しかし増加ペースは鈍っている
～ 中国の輸出入増加率と貿易収支 ～



(資料) 中国海関統計

主任研究員 伊藤 さゆり (いとう さゆり) (03)3512-1832 ito@nli-research.co.jp

ニッセイ基礎研究所 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-7 3F

ホームページアドレス : <http://www.nli-research.co.jp/>

＜ 中国経済動向 ～ 鈍化し始めた貿易黒字拡大のペース ～ ＞

●2007年も貿易黒字は過去最高を更新するも、黒字拡大のペースは鈍化

(過去最高額を更新した貿易黒字)

1月11日、中国の2007年年間の貿易統計が他の主要指標に先駆けて公表され、輸出は前年比25.7%の1兆2,180億ドル、輸入は同20.8%増の9,558億ドルで、貿易額(輸出+輸入)が2兆ドルを突破したことが明らかになった。

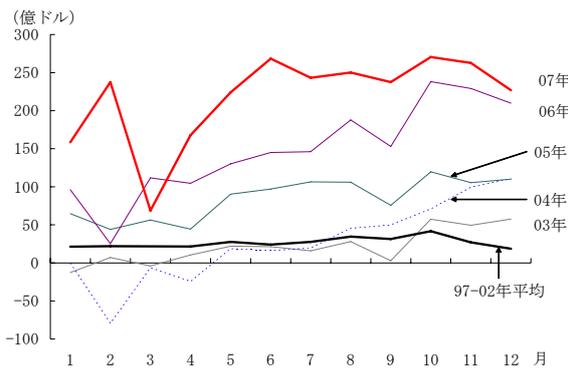
貿易黒字が定着した94年以降、2004年までは年300億ドル前後で推移していたが、2005年には前年から一気に3倍以上に増加して1000億ドルを突破、2007年は前年比47.7%と2005年～2006年には及ばないが高い伸びとなり、貿易黒字は2,622億ドルで過去最高を更新した(表紙図表参照)。

(月次ベースでは貿易黒字の急増に歯止め)

しかし、月次の動きを追うと、10月以降、3カ月連続で輸入の伸びが輸出を上回るようになっており、貿易黒字拡大のペースは大きく鈍っている(図表2)。12月は、輸出の前年同月比21.7%に対し、輸入は同25.7%となり、貿易黒字は226.9億ドルで、月間で過去最高となった10月の271億ドル、11月の263億ドルを下回った(図表2)。

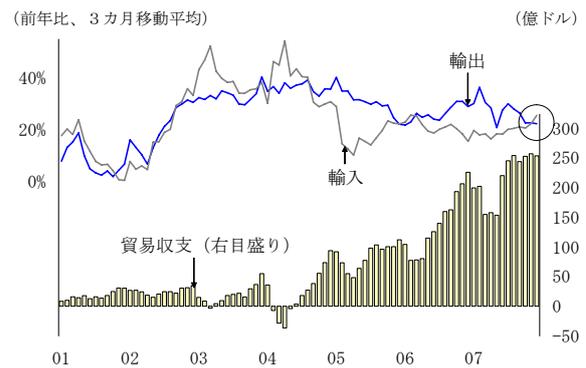
中国の貿易には、一年の中で10月が貿易黒字、12月が輸出入額のピークとなる季節性がある。2007年10月以降の貿易黒字と輸入の動きは、こうした季節性に沿った動きとなっているが(図表1)、輸出は12月が11月を下回り、年央をピークとする鈍化傾向も鮮明になっている。

図表1 中国の貿易収支(月次)



(資料) 海関統計

図表2 中国の輸出入増加率と貿易収支(月次)



(資料) 海関統計

(鉱物性燃料の赤字拡大、労働集約的製品と金属製品の黒字拡大に歯止め)

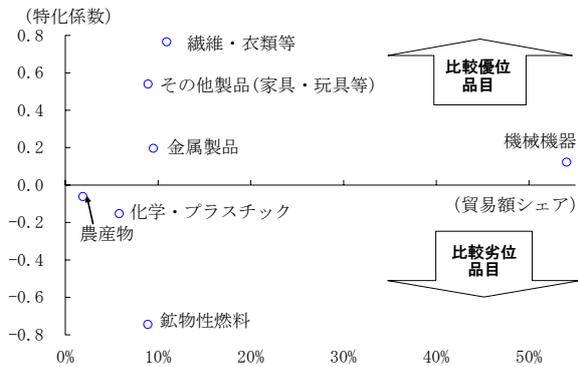
2005年以降の貿易黒字の急増には3つに側面がある。1つは、繊維・衣類・履物や家具、玩具といったその他製品という、早くから比較優位を發揮、輸出特化の度合いが高い労働集約的製品の黒字が拡大したことだ。もう1つは、機械、金属製品の貿易収支が黒字に転化、その後も黒字

幅の拡大が続いたことだ（図表3、図表4）。意欲的に設備投資に取り組んだことで、労働集約的な分野での輸出能力が拡大、付加価値と技術力による棲み分けが行われ輸出入双方向での貿易が活発な機械や金属製品では輸出能力の増強と輸入代替が同時に進展した結果と言えよう。

足もとの貿易統計を品目別に見ると、貿易黒字の拡大ペースが鈍ってきた原因は、原油価格の上昇を反映した鉱物性燃料の貿易赤字が拡大、労働集約的製品の黒字拡大ペースが鈍化、金属製品の黒字額も輸出急減速で減少していることがわかる（図表4）。

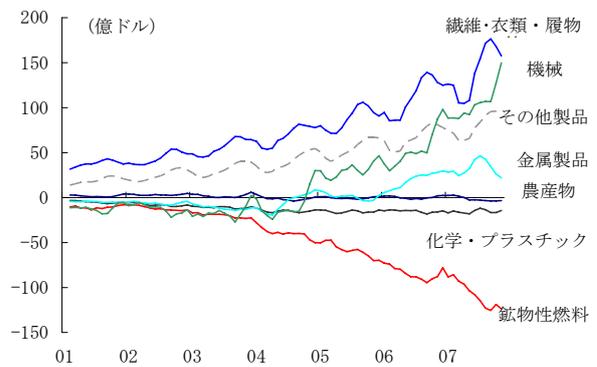
一方で、貿易総額（輸出+輸入）の過半を占める電気機器など機械機器の貿易黒字の拡大基調は続いている（図表6）。機械機器の貿易額が膨らんでいるのは、アジア域内での工程間分業、中間財の相互供給体制が構築されていることによるもので、輸出入の連動性が強い特徴がある。電気機器は、足もとでも輸出の伸びが輸入を上回る推移が続いており、例外的に貿易黒字の拡大が続いている。

図表3 中国の貿易の品目別シェアと特化係数



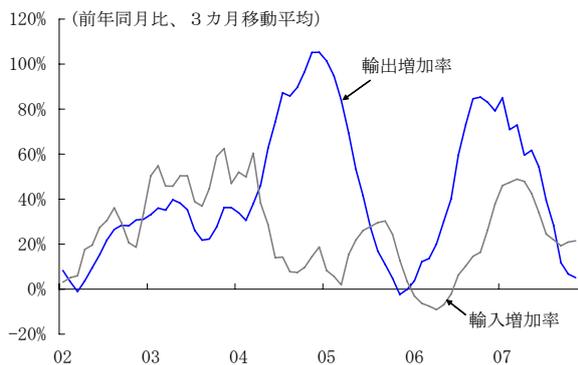
(注) 2007年1~11月実績
 特化係数 = (輸出 - 輸入) / (輸出 + 輸入)
 (資料) 海関統計、CEIC

図表4 品目別貿易収支（月次）



(注) 3カ月移動平均
 (資料) 海関統計、CEIC

図表5 金属製品の輸出入増加率（月次）



(資料) 海関統計、CEIC

図表6 機械機器の輸出入増加率



(資料) 海関統計、CEIC

●貿易黒字の頭打ち傾向は強まる見込み

(歯止めが掛かった輸出抑制強化品目での黒字拡大)

中国では、過剰投資の抑制に加え、2006年以降、産業構造の最適化と貿易摩擦の緩和の両面か

ら、エネルギーの大量消費や環境汚染につながる素材、労働集約的製品を対象とする付加価値税（増徴税）の還付税率の停止・引下げや輸出関税の付加、加工貿易の制限・禁止など輸出抑制措置が強化されている。労働集約製品の大量輸出によるエネルギー大量消費型の輸出を抑制しつつ、ハイテク産業の輸出を振興するのが狙いだ。

足もとの主力分野間での輸出伸び率や貿易収支の方向感の差は狙いどおりの展開ではあるが、すべてが政策効果として説明できる訳ではない。能力増強投資の一巡や、原油価格の上昇、米国の景気減速と高成長が続く中国との内外景気格差の拡大といった複数の要因が影響していると考えられよう。

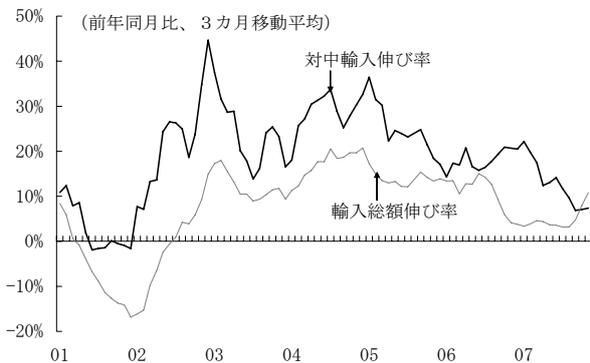
（ 「デカップリング」 期待通りではない輸出の動き ）

今後、焦点となるのは、輸出の約2割を占める米国経済の調整の深まりがもたらす影響だろう。筆者は、10月中旬の時点で、米国の調整が住宅市場に留まらず、個人消費の減速が明確になっても（1）米国市場において中国製品の競争力が高く、相対的に伸びの鈍化が小さいものに留まる、（2）米国向けの輸出が落ち込んでも、他国への輸出でカバーされる場合には、中国の輸出への影響は限られる可能性があると考えていた（Weekly2007.10.19「中国経済動向～米国とのデカップリングは続くのか～」）。

しかし、足もとの統計は、こうした「デカップリング（切り離し）」の期待通りの内容とはなっていない。まず、（1）については、米国の中国からの輸入の伸びは全体の伸びを上回るという構図は変わってきている（図表7）。中国の輸出抑制策の影響に加え、原油等の価格上昇で輸入額が膨らんでいることによるものであろう。

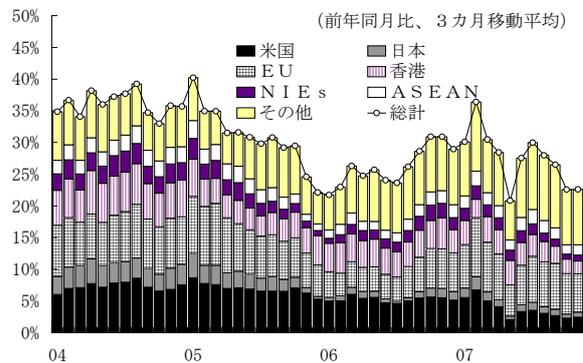
（2）の点では、対米輸出の寄与に対して、EUやアジア、その他新興国向け輸出の寄与が遥かに大きいものの、米国向けの輸出が減速すると同時に他の地域への輸出も減速するようになっている（図表8）。「デカップリング」よりは、むしろ連動性の強さを示しているように思われる。

図表7 米国の貿易と対中貿易



（資料）米国商務省

図表8 中国の相手地域別輸出増加率



（資料）海関統計、CEIC

（ 期待できないEUの需要アブソーバー機能の一層の拡大 ）

中国の貿易統計では、米国、EUに対して大幅な黒字を計上しているのと異なり、対日貿易収

支は、韓国や台湾とともに中国側の赤字となっている^(注)。これは、米国、EUとの結びつきは、製品の輸出先としての性格が強く、日本を含むアジアとは、特に電気機械の分野で、中間財などの供給の比率が高いことが反映されたものである(図表9)。

EUは、市場規模で米国に匹敵し、中国の輸出相手地域としてのウェイトでは既に米国を上回っていることから、米国の個人消費鈍化の影響を補う役割が最も期待される地域だ。しかし、中国とEUとの間でも近年の輸出と貿易不均衡の急拡大で摩擦が高まっていること(図表11)、EUの景気拡大ペースも鈍っていることで、一層の拡大は難しくなっている。

原油収入等で潤う中東、ロシアなどの新興国の需要にはある程度の下支えが期待できる状況ながら、中国の輸出は鈍化に向かうことになるだろう。

(注) これに対して日本の貿易統計では日本側の赤字基調となっている。これは貿易統計が、輸出は仕向地ベース、輸入は原産地ベースで作成されているため、日本の統計では、香港向けの輸出として計上される香港経由の再輸出分が、中国の統計では日本からの輸入として計上されることが主因である。

(中国の貿易黒字の頭打ち傾向は持続)

輸出の減速が輸入中間財等への需要鈍化をもたらすことに加えて、中国国内では投資過熱抑制のための金融引き締めが強化されており、先行きは輸入も鈍化が見込まれるが、輸入が輸出の伸びを大きく下回る可能性は低そうだ。引き締めが、内需の全面的な抑制を意図するものではないことに加え、原油・食料等の価格の高止まりが輸入金額を押し上げること、元高による輸入刺激効果が働くからだ。

中国は、外部環境の悪化によって、輸出偏重の是正を余儀なくされることになり、昨年10月以降、目立ってきた貿易黒字の頭打ち傾向は続くことになるだろう。

(気がかりな日本の対中輸出への影響)

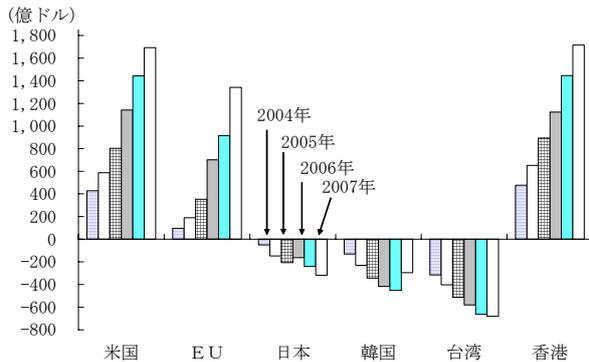
日本の貿易相手国としての中国は、2006年は僅差で米国に次ぐ第2位となったが、2007年1～11月期の実績では中国が米国を上回っており、第1位となる見込みだ。中国は、日本の輸入相手国としては、すでに2002年の時点で第1位となっており、その後も第2位の米国との差は拡大が続いている(図表13)。2007年は、対米輸出が減少する一方、中国向けの輸出は増加が続いたことで、輸出相手国としての地位の差は大きく縮小、中国向けの再輸出製品を多く含む香港向けとの合計では米国を上回った(図表14)。

日本の輸出相手国としての中国のウェイトの高まりは、米欧など第3国向け輸出の生産拠点のシフトに関わる中間財供給等の結びつきが強化されたことと、中国国内の需要拡大と2001年のWTO加盟によって中国市場の開放度が高まったことで中国国内市場向けの輸出が拡大したことによるものだ。

中国の輸出が減速すれば、日本からの中国向けの輸出のうち、輸出製品の生産に関わる部分は鈍化することになる。今のところ持ちこたえている電気機械への世界需要の動きは、この部分の流れを左右する大きな要因として引き続き注目されよう。

加えて、2008年 は、中国の成長が内需に軸足を移すと見られることから、中国国内市場での中国企業や欧米企業、アジア企業等に対する競争力の重要性が増してくるだろう。日本の統計よりも早く公表される中国の12月の統計で、輸入全体の伸びが加速する中、日本からの輸入が鈍化していることは、気掛かりな材料である（図表12）。

図表9 相手地域別貿易収支



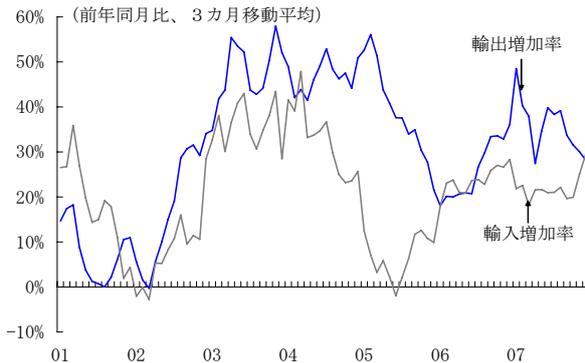
(資料) 海関統計、CEIC

図表10 中国の対米貿易



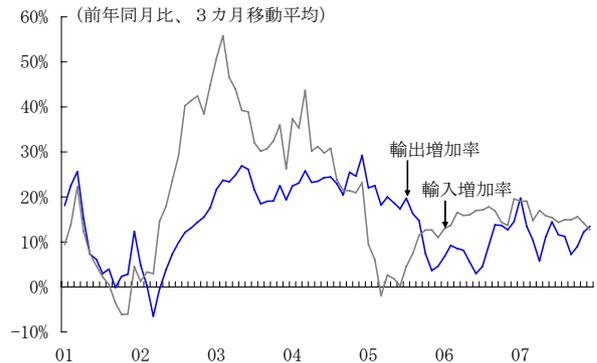
(資料) 海関統計、CEIC

図表11 中国の対EU貿易



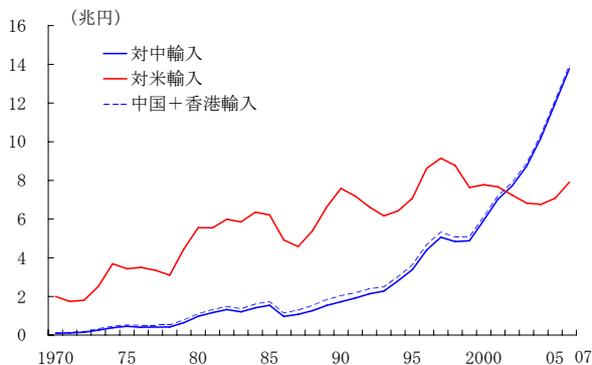
(資料) 海関統計、CEIC

図表12 中国の対日貿易



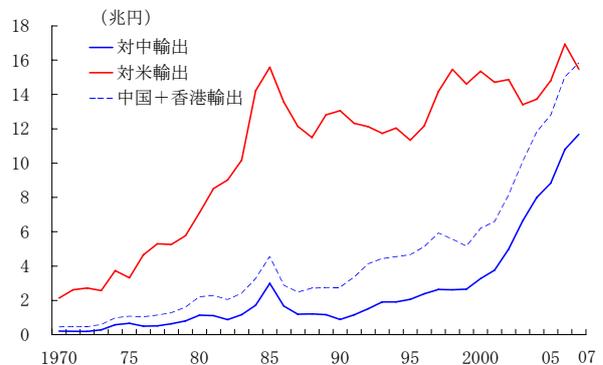
(資料) 海関統計、CEIC

図表13 日本の対米、対中輸入額の推移



(注) 2007年は1～11月の実績 (資料) 財務省

図表14 日本の対米、対中輸出額の推移



(注) 及び (資料) 図表13と同じ

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。

(Copyright ニッセイ基礎研究所 禁転載)